

『ローマ, ナポリ, フィレンツェ(第3版)』小論

A propos de
Rome, Naples et Florence, troisième édition
de STENDHAL

白 田 紘

résumé

Nous avons deux éditions de *Rome, Naples et Florence* de STENDHAL: l'une est *Rome, Naples et Florence en 1817* et l'autre *Rome, Naples et Florence troisième édition*. Dans ce mémoire, nous examinons les textes de ces deux éditions qui ont été écrits à un intervalle de dix ans. Le texte de la première est caractérisé par la colère de Monsieur DE STENDHAL envers les Italiens qui laissent gouverner leurs pays par les Autrichiens et les prêtres. Il les incite, discrètement, à arracher les deux Chambres à leurs dominateurs. Nous pourrions considérer ce livre comme un pamphlet politique. Dans le texte de la dernière, Monsieur DE STENDHAL se montre comme observateur perspicace des mœurs italiennes, en racontant des œuvres d'art et en citant beaucoup d'anecdotes. Il recherche aussi l'influence napoléonienne sur l'Italie, et rend gloire à BONAPARTE qui y a répandu de la justice et de l'esprit d'ordre pendant quatorze ans. Nous trouvons qu'il y a une faible différence de caractère entre deux textes.

Après la publication de l'édition de 1817, installé pendant longtemps en Italie, surtout à Milan, STENDHAL devient plus compréhensif envers l'Italie, et assimile bien ce qu'il apprend dans la culture italienne. Les fruits de ce séjour sont les suivants: *De l'Amour, Racine et Shakespeare, La Vie de Rossini*, etc. Nous pouvons dire aussi que ces fruits culturels sont introduits dans *la troisième édition* de son livre de voyage. Là, il est amateur non seulement de musique mais de peinture, surtout de celle de l'école bolognese, partisan de romantisme, féministe au sens large du terme, et enfin conteur des récits de passion. Pour nous, il est facile de découvrir, sous ces visages variés, celui d'un futur romancier.

序

スタンダール STENDHAL (本名アンリ・ベール HENRI BEYLE) のイタリア紀行文『ローマ、ナポリ、フィレンツェ』は、1817年に『1817年のローマ、ナポリ、フィレンツェ』*Rome, Naples et Florence en 1817* という表題で初版が刊行されたあと、10年後の1827年にこれを増補した『ローマ、ナポリ、フィレンツェ (第3版)』*Rome, Naples et Florence, troisième édition* が刊行され、二つの版が存在する。後者は、表紙に「1826年」の年号が入っているために『1826年版』と呼ばれている。ここでも前者を『1817年版』、後者を『1826年版』と略称する。後者がなぜ「第3版」なのかとか、それぞれの出版経緯については、拙訳の「あとがき」に書いたことなので、ここでは触れない⁽¹⁾。

すでに周知のことであるが、『1826年版』は、『1817年版』の約3分の1を採り入れたうえ、全体の分量としてはそのほぼ2倍になっていて、結局6分の5近くはオリジナルであるので、単に増補版というよりは、この二つの『ローマ、ナポリ……』は別の著作と考えた方が適切である⁽²⁾。しかしながら、これもすでに書いたことだが、1854年に刊行されたミシェル・レヴィ版 *édition Michel Lévy* 以降、『ローマ、ナポリ……』はディヴァン版 *édition du Divan* とシャンプイオン版 *édition Champion* の二つの大きな全集などで、『1826年版』を基にして、この版で切り捨てられた『1817年版』の3分の2あまりを補遺として付けるということをしている。これは、『1817年版』が「これを発展させた新版に取って代わられた」という発想から編集されたものであるが、新版のなかに採り入れられた部分よりも多い放棄された部分をわざわざ補遺として付けるということは、いわば二つのテキストの「コンテキスト」を無視したやり方でしかないのではないかと考えられる。この形は1973年に出版されたプレイヤード版 *Bibliothèque de la Pléiade* のヴィクトル・デル・リット VICTOR DEL LITTO 編集『イタリア紀行文集』*Voyages en Italie* で改められ、二つの『ローマ、ナポリ……』が、それぞれ別個のテキストとして、併せて収められて、はじめて両テキスト、とりわけ『1817年版』が復権した⁽³⁾。

わたしはここで、『1826年版』において、『1817年版』の何が採用され、何が捨てられたか、また何があらたに増補されたかを見て、二つの『ローマ、ナポリ……』のそれぞれの特色を見、また両者のあいだで、つまりかれの作家生活の10年間で、スタンダールのイタリア観なりイタリアの文化理解がどのように変遷し、それがどのような形でかれの作家としてのものの見方、考え方に結実して行ったかを考察したい。

1 『1817年版』と『1826年版』の設定上のちがい

『ローマ、ナポリ……』は、いずれの版とも日記体の紀行文であるが、周知のように、これは虚構の日付であり、その日にアンリ・ベールが記されている土地を訪れたという事実とは必ずし

も一致しない。また、記されている出来事や人物に、日付に記されたその日その場所で遭遇したという証拠もない。アンリ・ベールは匿名の著者スタンダール氏にイタリアを旅行させるという設定でフィクションを書いているのである。

すでに書いたことの繰り返しになるが、『1817年版』では、1816年10月4日にベルリンを出発して、1817年8月26日にフランクフルト・アム・マインに帰着する約11ヶ月に渉る騎兵士官ド・スタンダール氏の旅日記であり、これに対して『1826年版』は、1816年9月2日に同じくベルリンを出発して、1817年10月18日にローマで終わる約14ヶ月半の同氏の日記である（ちなみに、こちらでは「騎兵士官」という身分は記されていない）。旅路もそれぞれで異なり、前者は、ベルリン、ミュンヘン、ミラノ、パルマ、ボローニャ、フィレンツェ、ローマと南下し、ナポリまで行ってローマに戻り、フィレンツェ、ボローニャを再び訪れたのち、アドリア海の方に向かって、アンコーナまで行く。帰路はパドヴァ経由でヴェネツィアに至り、ミラノに再び滞在して近郊を訪れたのち、スイスのジュネーヴとローザンヌに寄りフランクフルトに帰るものである。一方、『1826年版』では、ベルリンからウルム、ミュンヘン経由でミラノに入り、ボローニャ、フィレンツェから、ローマを通過してナポリに達するが、そのあとオトラント、カタンツァーロ、レッジョ・ディ・カラブリアとイタリア南部を旅して、ナポリに戻り、最後はローマでの滞在となる。

このように旅の経路は、『1817年版』では南はナポリまで行き、一方でアドリア海沿岸地方とヴェネツィアを訪れているが、『1826年版』ではナポリから南の地方を巡ることになっている。しかも、後者ではスタンダール氏の旅日記はベルリンに帰り着くことなく、ローマで突然中断している。こうしたそれぞれのコースがベールの旅の実体験に基づくものではないことは、かれの生涯を瞥見してみればよく分かる。ベールは一生のあいだにナポリ近郊から南へは行っていないし、とりわけ、1817年当時までのイタリア体験は、ローマやナポリを短時日で訪れているものの、ほとんどミラノを中心とする北イタリアに限られている。

したがって、『ローマ、ナポリ……』を見てみれば、内容的にも『1817年版』のアドリア海沿岸地方や『1826年版』のカラブリア地方が付け足りでしかないことは一目瞭然である。ベールは読者にスタンダール氏とともにイタリアを旅させている気分にして、かれの観念を伝えることだけを考えているのである。日記のなかで、訪問地のことにはほとんど触れずに、その地とはまったく関係のない事柄を記している箇所が見られるのが、またその好例であろう⁽⁴⁾。

とは言っても、そこには当然ベールのイタリア体験が反映していることは言うまでもない。『1817年版』には、1800年にナポレオン NAPOLEON BONAPARTE の第2次イタリア遠征軍に従ってはじめてイタリアの地を踏んだとき（約6ヶ月）と、1811年に休暇で訪れたとき（約3ヶ月）、1813年の北イタリア短期滞在のとき（約2ヶ月）、そしてとりわけ、1814年からのいわばイタリア亡命のとき（1816年の2ヶ月のグルノーブル滞在を挟んで14年8月から17年4月まで）と、かれの生涯の前半のイタリア滞在の体験に裏付けられている。また『1826年版』には、文筆家とし

で新聞や雑誌に寄稿し、小説はまだ発表していないものの、すでに著作もある文人として、17年以降の数次に渉る滞在、とりわけ1819年10月から21年6月までのミラノ滞在などが反映している。

2 『1826年版』で再録されなかった部分

すでに述べたように、『1817年版』の3分の2近くが、『1826年版』に再録されなかったわけだが、最初にそれがどのようなものであるかを見てみたい。それは当然、スタンダール氏が『26年版』のなかでは訪れなかった土地の日記に関係するが、ローマやボローニャやミラノのように、『26年版』でも訪れて、しかも日記に大きくスペースをとっている土地における記述のなかにも、再録されなかった部分ないしは放棄された部分がある。それら再録されなかったものについて内容的な側面から見てみよう。

まずまとまった分量の記述で再録されなかったものとしては次のようなものがある。

- 1) 1817年4月10日付(フィレンツェ)で記されるイタリア語に関する記事。著者による註も含めて拙訳で8ページ。
- 2) ボローニャ1817年5月10日および11日付で記されるアルフィエーリ VITTORIO ALFIERI に関する記事。これはネーリ伯爵 Conte NERI の話として提示され、「伯爵のノートの翻訳」という形をとる。周知のように、若い日にベールはこの詩人に心酔した時期があったが、ほどなくその熱も冷め、ここではアルフィエーリの人と作品について批判的に記されている⁽⁵⁾。拙訳で7ページにのぼる分量である。なお別に付録でこの作家の悲劇作品目録が掲げられている。
- 3) ロレート1817年5月31日付でフォーサイト大佐 Colonel FORSYTH の語る革命前のフランスの社交界に関する記事。これは拙訳で10ページの分量。
- 4) コモ湖畔ヴィッラ・メルツィ1817年7月18日付、イタリア王国の歴史とイタリアの芸術の現状に関する考察。拙訳で14ページの分量。
- 5) ローザンヌ1817年8月20日付の1817年イタリア音楽高踏派の歌手と作曲家名簿。拙訳で3ページ。

以上であるが、これらのうち、2)と3)は、スコットランドの雑誌『エディンバラ評論』*Edinburgh Review* 第15巻30号(1810年1月)からの借用であり⁽⁶⁾、この雑誌からは他にも、6月20日付の註のなかで登場するイタリアの博物学者ブロッキ GIOVANBATTISTA BROCCHI についての情報を第26巻51号(1816年2月)から、3月15日付で触れられるフランシス・マシロン FRANCIS MACIRONE の著書(『ジョアシャン・ミュラの没落と死に関する興味ある事実』*Interesting Facts Relating to the Fall and Death of Joachim Murat*)や、5月22日付で触れられるゲーテ JOHANN WOLFGANG GOETHE の『詩と真実』*Aus Meinem Leben* 続巻(つまり『イタリア紀行』*Italienische Reise*)についての情報を第28巻55号(1817年3月)から得たりしている。またこのゲーテの『イタリア紀行』については、『エディンバラ評論』のこの書評

のなかから孫引きして、数カ所で、スタンダール氏はあたかも自分の見聞した体験や観察のように利用している。つまり5月1日付のなかの1カ所、6月24日付のなかの1カ所と、7月10日付のあとに挿入された「ヴェネツィア断想」のなかの2カ所である⁽⁷⁾。

これら『エディンバラ評論』からの無断借用などはすべて『26年版』では削除されている。

1) のイタリア語については、イタリアの地方や都市ではそれぞれのイタリア語（地方語）があることを指摘したうえで、トスカーナ語のような古めかしい言葉が共通語になっていて、フィレンツェがそれを自慢しているような事態が、イタリア語に混乱を起こしていると指摘し、「即座に二院を持てば、議会の討論でイタリア語は救われる」と書く（拙訳 p.113）。ただし、このイタリア語に関しては『26年版』1817年1月14日付のなかで、ランテ枢機卿の話として部分的に形を変えて再び取り上げられている。つまり、フィレンツェの住人が15世紀のイタリア語から抜け出せずに、滑稽な表現に陥っている様子を論じている。

4) のヴィッラ・メルツィにおけるスタンダール氏の考察は、『17年版』の他の箇所でも散発的に触れられていることだが、前半が、1796年のナポレオンのミラノ入城から1814年の王政復古に至るまでのイタリアの政治の状況分析である。そして最後は、「この若い国民の歩みは、たまたま1814年に中断したが、天才と自由を生み出す聖火はどうなるだろうか」（p.216）という問いかけで終えている。後半は、芸術についてイタリアではペダンティズムが障害になっていると記しながら、イタリアの置かれた現状の真実を認めることから始めるように提案をしている。

最後の5) は、イタリア音楽に馴染みのないフランスの読者への紹介という意味で付け加えられたものと考えていいだろう。

まとまった内容の記述で再録されなかったものとしては以上であるが、それでは全体的にどのような内容の記事が『26年版』に再録されなかったのだろうか。それらの記事のなかに散りばめられた見解なり考察を拾い出してみる。

まず、前記3) と関係するイタリアとイタリア人の現状分析がある。スタンダール氏は中世の諸共和国が滅んでからイタリアは決定的な不振に陥っていると考える（p.120）。かれの言によると「ローマとナポリはヨーロッパ風に衣をつけた野蛮国」である（p.106）。1796年のナポレオンの遠征によって揺さぶりをかけられ、しばらくしてイタリアはオーストリアの支配から脱出するものの、この好機を活かすこともできず、またナポレオンの支配も1814年に終わりを告げるが、その絶好の機会もよい方向に利用できず、結局「あらゆる廃品の再生」を行なったと言う（p.135）。もっかは「一切の法と正義が不在」であるとさえ断言し（p.151）、イタリアで音楽が栄えているのは、すべてに対する不信が倍加しているせいであると考え（p.152）。

イタリア人については、自由を希求しているものの、自由のメカニズムを研究することを怠り、ただひたすら共和制に憧れて「ある朝天使がそれを運んできてくれると思っている」（p.135）が、共和制は軍事独裁へのもっとも確実な道であるとはねつける。そして、イタリア人のあいだでは

ダンテのような過去の自国の大作家を真似ることと、ペダンティズムが蔓延しているうえに、しかもそれぞれの町は相互に反目していて、自由にとって障害になっていると述べる (p.171)。ド・ベロワ DORMONT DE BELLOY 流の愛国者のお追従で墮落させられていて、町の栄光を少しでも批判して傷つけると瀆聖になると批判的である (p.124)。スタンダール氏はイタリア人について、さらに厳しいことを言っていて、「知識階級では無知が手の施しようもないほどであり、庶民にあっては悪辣さが深く根を張っている」(p.94) とか、「聖ペテロの遺産の住人よりも、エリー湖の未開人を文明人にする努力の方が少なくすむ」(p.104) とまで書いている。勿論、これは悪意から書いていることではない。

次に、スタンダール氏のイタリアに対する提案である。1816年3月16日付で、コンサルヴィ枢機卿 Cardinale ERCOLE CONSARVI に非難の余地があるとすれば、三箇条からなる憲法を試行しないことだと、その草案を示している (p.94)。その憲法草案の骨子は二院制であるが、二院制はスタンダール氏の固定観念でもあるかのように繰り返される。イタリアは二院制になってからしか文学を持たない (p.13) のみならず、二院制が施行されるまでは、何もイタリアには生まれない (p.85) し、イタリアの精神的荒地を立派にする要素としても二院の討議が一翼を担う (p.185) のである。スタンダール氏は、どうしたら二院制が実現するかについては述べていない。なお二院制については『26年版』でも継続して民主主義の根幹として考えられている様子が見られるが、『17年版』におけるほど強く主張していない。

そして最後に、イタリア人を煽るような発言が目につく。「バイオリンの弓のよさはどうでもよく、改革しなければならぬのは楽器本体」(p.97) であると、イタリア人の希求する自由（言い換えれば外国の支配からの独立）の獲得が、いわば意識改革であることを述べている。これは、1817年7月18日付のなかで「国民の性格の強さと国民の理性の光が否応なくもたらす程度の自由しか、国民は持つことができない」と言い換えられている (p.220)。

これらはイタリアへの愛を迸らせながら記され、いわば「愛するものの墮落が悲鳴をあげさせている」わけである。スタンダール氏はイタリアの幸福を生み出しやすい風土やイタリア人のひとの善さを一方で書きながら、イタリアとイタリア人が陥っている現状をつきつけて、嘆いている。そしてさらにスタンダール氏のいつもの手法である、フランス（ないしはフランス人）や英国（ないしは英国人）を対比させながら、こちらの美点をきわだたせるのである。

以上に見るように、『17年版』は、スタンダールのイタリアに対する感情がきわめて直截的に表れている著作であり、そこからはまたイタリアを現実に支配しているオーストリアや教皇庁（プレティズモ＝僧侶支配）に対する反感が滲み出ている。これはいわゆる「パンフレット」 un pamphlet（政治風刺文書、攻撃文書）であり、扇動文書であると定義づけることができよう⁸⁾。何しろスタンダール氏は「われわれを巻き込んでいる大きな変革のただなかでは、もはや政治のなかに陥らずには、一国民の習俗は研究することができない。一七八九年にはじまった革

命は、世界的な二院制の確立で一八三〇年に終わるだろう」（p.209）と王政復古になってやっと3年が経過したばかりのこの時期に書いているのである。

こうした部分が『26年版』では再録されていない。

3 『1826年版』で再録された部分

すでに書いたように『26年版』で再録された部分は『17年版』の3分の1程度であるが、それはどのようなものであろうか。主として訪問地が両者で重複する部分、つまりミラノ、ローマ、ナポリ、フィレンツェなどで記されたとする日記の部分であるが、それらは主として芸術に関する記述と言ってよいだろう。

ミラノにおいては、スカラ座、そこで上演されたオペラ『青銅の頭像』、およびその作曲者のソリーヴァと出演者の歌手、そしてカタラーニ夫人のコンサートなどである。フィレンツェについては『17年版』ではもともと記述は少なく、その少ない部分を観劇で占めている。往路の『セビーリャの理髪師』とロッシーニについての記述だけが再録されている。（復路の『エヴェリーナ』とモンベッリについては割愛されている。）

ナポリにおいては、サン・カルロ劇場とフィオレンティーニ劇場、それらの劇場における公演、デュポールやヴィガノやヴェストリス3世のパレエ、『オセロ』とロッシーニ、ビアンキの建築、ヌオーヴォ劇場の『サウル』とアルフィエーリ、ガレンベルグの『アガダネカ』、デ・マリーニ一座、ポンペイなど、2ヶ月あまりの滞在に数多くの観劇や見学が盛り込まれているが、それらはそっくり『26年版』に再録されている。

ローマに関しては、アルジェンティーナ劇場やヴァッレ座での観劇、システィーナ礼拝堂やサン・ピエトロ大聖堂やジェズ教会のミサ、パンテオンのチマローザ像などがすべて再録されているが、『17年版』においては冬のローマ滞在が、『26年版』では8月の滞在となり、クリスマスのミサが聖母被昇天祭のミサに変更されている。

また、バイロン GEORGE GORDON BYRON との出会い（ヴェネツィア1817年6月27日付）は割愛されたものの、ロッシーニ GIOACCHINO ROSSINI との出会い（テラチーナ1817年1月9日）は再録されている。

再録部分は、以上のようなものであるが、しかしそこでは芸術プロパーが語られているわけではない。スタンダール氏は「ギャラリーの絵や記念建造物の柱を数え上げるような紀行文作家」を軽蔑している（1816年10月30日付）。当然のこととして、芸術からそれらの作品を生み出した国民や背後の政治、社会、風俗にまで展開していく。そして、そこに批判的、風刺的な辛辣な言辞が付け加わることが発生する。『青銅の頭像』*La Testa di Bronzo* については、原作がフランスのメロドラマであることを知ったスタンダール氏は、「パリで軽蔑されているこれが、ミラノでは注目の作品である。墮落を誘う君主政体がこれだ。イタリアは二院制になったあとで、はじめて文

学を生み出すだろう」(p.13)と記さずにはいられないのである。(この発言のなかの「墮落を誘う君主政体がこれだ」は『26年版』には再録されていない。)サン・カルロ劇場の再建については、「三百日要して再建され、クーデタの働きをした。これが最上の律法以上に民衆を国王に結びつけた」(p.50)とあり、『26年版』に再録されなかったこのあとの部分では、「それくらいに国民から愛されるということはたやすいのだ」と記している。1817年3月2日付(ナポリ)では、喜劇について触れながら、「さらにこの分野では、二院制が施行されるまでは、何もイタリアには生まれまいだろう。かれらは自分たちのあるがままの姿を示す勇気がなく、まだR・ル・ボッシュの叙事詩の理論の段階にいる。イタリア的コミックはデグランチーヌの『フィラント』の色彩を帯びるだろう」と書いているが、「二院制が」から「段階にいる。」までが『26年版』では割愛されている。

このように、『17年版』のパンフレットとしての性格は、著書の隅々まで浸透していて、一貫している。しかしながら上で見たように、『17年版』から再録した部分について、『26年版』では一部でいわばその鋭い棘にあたるものを抜いている様子が見られるのである。

4 『1826年版』で付け加えられた部分

『26年版』で新たに増補された部分は、すでに記したように6分の5近くにのぼる。したがってこの版は増補版と呼ぶよりも、新たに書き起こしたものに『17年版』の一部を付け加えたものと言った方が適切であろう。しかし日記の日付をあえて1816年から17年にかけてのあいだに保存したのは、やはり筆者アンリ・ベールに増補版という意識が働いたためであろうし、またそれゆえ「第3版」と称していると推測される。こちらでは、やはりじっくりと書き込まれているという印象があり、『17年版』の鋭いが深みのない速度のある筆法とは異なっている。

内容的には、全体に芸術に関するものが厚みを増している。この点にかぎれば、ローマやナポリについては、前節で示した『17年版』の再録で間に合わせているが、ミラノ、ボローニャ、フィレンツェでは加筆が多い。新規に取り上げられたものを以下に瞥見してみる

ミラノでは、ドゥオモをはじめとする教会(サン・チェルソ、サン・ロレンツォ、サン・フェーデレ、グラツィエ修道院、サン・タンブロージョ、サンタ・マリア・デッラ・パッショネなど)や館(マリノ館、ディオッティ館、ブレラ館、リッタ館、ヴィッラ・ベルジョイオーゾなど)などが、長短、角度も様々に取り上げられるが、そのいくつかは大病院(オスペダレ・グランデ)や市門などとともに建造物そのものの芸術的側面が記される。スタンダール氏によれば、「音楽について建築は、芸術のなかでも、かれら〔イタリア人〕の心をもっとも深いところで揺り動かすもの」(拙訳 vol.2, p.116)なのである。また、演劇についてはロカテッリの喜劇と笑いが、絵画についてはアッピーアーニ、詩についてはパリーニ、ペッリコ、モンティ、マンゾーニ、グロッシなどの詩人が語られる。ボローニャでは、ギャラリーとカラッチ一族などボ

ローニャ派の画家、ガリセンダの塔やマドンナ・ディ・サン・ルカの建物、フィレンツェでは、サンタ・クローチェ、カルミネ教会、サン・ロレンツォ、ピッティ宮殿、ヴェッキオ宮殿、フラ・バルトロメオ、フィレンツェ派の画家、モンティのソネットなどについて触れられる。マリオネットについては、フィレンツェ、ナポリ、そしてローマでの観劇が記されるが、とりわけ最後のフィアノ館における『カッサンドリーノの絵画修行』*Cassandrino Allievo di Un Pittore* は1817年10月10日付で詳細が長ながと述べられている（拙訳で7ページに渉る）。これら芸術に関係する記述が、イタリアの社会や風俗などと多様に結合して記されていることは言うまでもない。

また、『26年版』の特徴として、逸話が極度に増加したことがあげられる。それらを以下に並べてみる。

- ・ジリエッティとジーナとマラスピナ（友人の語る話、1816年10月1日付）
- ・ヴィテレスキ伯爵（11月13日付）
- ・テオドリダ・R***（ファスカリーニ夫人の棧敷席で話された逸話、11月19日付）
- ・N***侯爵とヴィオランティーナ（12月12日付）
- ・レプリ侯爵の財産（タンブローニ騎士が語る逸話、12月29日付）
- ・ラウレッタとニコラ（オットフレディ夫人がナポリから受け取った手紙のなかで語られた話、12月31日付）
- ・ラディキ伯爵（R***大尉の話、1817年1月6日付）
- ・カミーユと***伯爵（ボローニ大尉の語る逸話、1月7日付）
- ・ローゼンフェルト（1月10日付）
- ・アルヴァレーゼ伯爵（1月12日付）
- ・ヴァルマーラ伯爵夫妻とガルディング（1月16日付）
- ・アペニンの追いはぎ（ピエトラマーラの宿屋で聞いた話、1月19日付）
- ・ラオディーナ（2月5日付）
- ・パレッラ（ルナヴァン大尉の語る話、5月20日付）
- ・人妻と恋人（5月28日付）
- ・サンタ・ヴァッレ公妃（10月18日付）

ざっと以上のごとくであるが、恋愛事件を扱ったものが大部分である。なにしろスタンダール氏は「人間の心の動きを詳細になぞる話が熱狂的に好きである」（12月12日付、vol.1, p.132）と告白しているくらいである。他にも逸話に近いものは数限りない。たとえば、ラ・ニーナ LA NINA (NINA VIGANO) の語るヴェネツィアの逸話（1816年11月12日付）、若い娘の前で恋に一喜一憂する母親の話（12月8日付）、恋人にもう愛されていないことを知ったギタータの嘆き（12月12日付）、ルイ14世を真似るポーランドのある貴族の話（1817年1月2日付）などなど。そして

逆に逸話以上のものとして、1817年1月17日付で記されるボローニャのベンティヴォーリョ家の歴史、4月30日付で記される1799年のナポリ革命の事件などがあり、これらは年代記ないしは物語と言ってもいいくらいである。現にスタンダール氏はみずから前者を「小説的な話」と呼んでいる (vol.2, p.66)。そしてまたミラノ史が「ウォルター・スコットのようにおもしろい」と述べたあと、「ヴィスコンティ家の年代記ほど生彩のあるものがあるだろうか」と年代記への嗜好も明らかにしている (11月18日付, vol.1, p.78)。

スタンダール氏の逸話愛好はすでに『17年版』のなかにも見られるが⁽⁹⁾、そこでは抑制している様子が目につく。たとえば、1817年1月4日付には、「ぼくの日記のなかにはこの偉大な大臣〔コンサルヴィ〕に関する二十以上もの逸話が書いてある」と述べるが、逸話そのものは披露されない。また、2月25日付では、「今朝ぼくが話してもらった信じられないような逸話」とあるが、同じくそれがどのようなものかは明らかにされない。2月9日付では、ギータという若妻の生涯は筆者の日記のなかで11ページも占めていると言うが、その「小説にもまさる生涯」の片鱗さえも明らかにしてもらえない (p.57。これはそのまま『26年版』2月28日付に再録)。かれに言わせると、「小説は、細部にまで涉って語る時間があり、なおかつ眠くてたまらない場合以外には興味を引かないので、哲学的観察にあたるものだけを書く」(5月2日付, p.129)ということになる。しかし「どんなにこれらの漠然とした結論を除去して、それを引き出してきた逸話を記したいことか」(6月10日付, p.175)とも書いている。

『26年版』では前掲のように数多くの逸話が挿入されているが、それにもかかわらず、オトラント1817年5月15日付では「サンタピロは最後に心引く逸話を語ったが、それを印刷したとしたら醜悪になるだろう」とか、10月4日付では、「みんなの知っている七つ八つの別の逸話を話したとしたら、あまりに不道徳になるだろう」と書き、同じく10月4日付の最後では「この小冊子が版を重ねれば、ぼくの先の主張を裏付ける十の逸話を示すだろう」と述べて、スタンダール氏にはまだ語りきれない逸話があることがほのめかされている。

しかし、この最後の引用で見られるとおり、スタンダール氏は逸話を観念との連続において提示していて、恋愛事件の逸話にしても、多くはイタリア的な側面、あるいはイタリア人の気質や習俗の例示となっている。

以上に見るように、『26年版』は芸術的な側面と逸話で大きく膨らんでいる。

5 『1826年版』における内容的側面

この『26年版』に盛り込まれた主要な観察なり考察はどのような内容のものであろうか。この点では一見『17年版』と大きな隔たりはないように思われるが、そのあたりはのちに検討してみたい。とりあえず以下の3点に集約できるように思われる。

1) まずイタリアの習俗 (政治や社会の姿, イタリア人の習慣などを含む)。ここにはそれと対

立するフランスの習俗も記される

2) ナポレオンの業績

3) オーストリアや教会の支配に対する反感

最初のイタリアの習俗については、イタリア紀行文である本書は『17年版』同様、当然のこととして、多様な角度から観察されている。イタリア人に関しては「ひとの善さ」le bonhomie とか「自然」le naturel「素朴」la simplicité「陽気」la gaieté, さらには「迷信的」superstitieux などの一般的な性質が繰り返されるほか、「現実にかかる事故や災難よりも、それらについて自分の想像力が作り出すイメージを恐れる」(vol.1, p.114) ことや、「現在の気持ちに我を忘れる」(vol.1, p.147) こと、「お金に関して以外、将来に対して無頓着」(vol.2, p.26) であることなど、その感情に左右される気質が指摘される。この延長として、「イタリアの夫人にとって、たいへんな美男子が阿呆でしかないようだ気づくのに二、三年必要である」(vol.1, p.206) とか、権力者の支配的な情熱を探って、権力者に気に入られようとする様が見られる(1817年1月10日付)という観察の結果が示される。イタリア人は、義理で笑ったり、笑うことで知ったかぶりを表したりするようなことはない、これは暗にフランス人を批判しているわけだが、イタリア人をもちあげることで同胞に刃が向けられる。つまり、フランス人の「目立ちたがり」la fureur de se mettre en avant「虚栄心」la vanité「気取り」l'affectationが繰り返してやり玉にあげられる。「ある国の若者たちが持っている、話したがったり目立ちたがったりする熱病は、ミラノではかれらに対する憎しみをかき立てる」(vol.1, p.32) とフランス青年のことを言っている。そしてフランス人がそんな場合に発揮する「機知」l'esprit について、スタンダール氏は容赦ない。「〔フランス人は〕状況の深刻さにもかかわらず、気に入られようというつもりから、冗談を言う欲求に負ける」(vol.2, p.206) と指摘して、「フランス人がおもしろがる機知は、イタリア人には不快だということだ」(vol.1, p.196) とか「イタリアのサロンではフランス的機知は居場所がない」(vol.2, p.28) などと繰り返して書いている。フランス人については、1817年1月17日付のドン・トンマーソ・ベンティヴォーリ *Don TOMMASO BENTIVOGLIO* や、7月15日付のメルフィ夫人 *Madame MELFI* のパリ報告の記述のなかで批判的に長ながと記されている。スタンダール氏がモンテスキュー *MONTESQUIEU* の『ペルシャ人の手紙』*Lettres Persanes* (1721) を念頭に置いていたかどうか考えさせられる部分である⁽¹⁰⁾。

一方、イタリアの欠点としては、『17年版』でも指摘されていたが、自分の町に対する極端な愛情を、スタンダール氏は自分流に「控え室の愛国情」le patriotisme d'antichambre と呼んで、問題視している (vol.1, p.186)。各都市が自分の町に関係するものを優れていると考え、他の優位を認めないのだと言う。古くからイタリア半島はいくつもの国家に分割され、それぞれの都市は独自の文化を持ち、言葉も同じイタリア語でありながら相当に異なるわけだが、カヴァレッティ氏 *Barone FRANCESCO CAVALLETTI* の言として「それぞれの都市はその隣接する都市を

嫌い、それを恐ろしく憎んでいて」、その結果「この国民は一致団結できない」(1826年12月6日付, vol.1, p.121)と記している。

さて2)のナポレオンの業績については、スタンダール氏の主張は一貫している。フランスにおいては光明を吹き消し自由を奪った暴君であるが、イタリアにおいては「悪弊を打破して、長所を擁護した」(vol.1, p.23)とか「不合理だけを粉碎した」(vol.2, p.115)と讃美するのである。しかし「かれの専制政治に益するように、秩序精神によってイタリアに良俗を取り戻した」(vol.1, p.85)のであって、ナポレオンを無条件に褒めあげているわけではない。ナポレオンは「下層民の足かせを取り除いた」ものの、民衆を徹底して目覚めさせることはできなかった。スタンダール氏は、何度も、イタリアが二院制の水準に達するためには、ナポレオンによる長年月の専制政治が必要であると書いている(vol.1, p.23, p.124, p.144; vol.2, p.13 etc)。しかし、現実にはナポレオンはセント・ヘレナに流され、そして仮にナポレオンが続いて君臨していたら、イタリアは立ち上がって強引に自由をもぎ取ったかどうか、その点については触れていない。

3)については、この著作がイタリアにおけるオーストリアの支配や教会の支配に反対しているものの、勿論、正面切って政府や教皇庁に逆らっているわけではない。出版の自由のない時代である。そうでなくても「ぼくの前稿はオーストリア警察に没収されるかもしれない」(vol.1, p.41)と不安を書いている。反権力的言辞は、微妙に隠蔽され、伏せ字にされている。この点線による伏せ字は、自主的に出版社と相談して差し替えられた部分のみならず、実際に検閲で削除を求められた部分もあるのではないかと推測される。それでもそこには、「ミラノはドイツの三個連隊の存在によって自尊心を傷つけられ、オーストリア皇帝に三百万支払う義務を負わされた共和国である」(vol.1, p.23)とか「テデスク〔オーストリア人〕の支配になってから、楽しみは飛散してしまった」(vol.1, p.82)などと書くほか、「オーストリアの専制政治は泥棒を撲滅する手だてを知らない」(vol.1, p.148)など、それとなく反発の気持ちを忍び込ませている。

また教会権力については、教皇庁に対するよりも、その下部構造を形成する部分に反発が記されている。教会の虚飾にうんざりし(1816年12月31日付)、情婦をもったりする僧侶の墮落を嘆かわしく思っている。教会は「あの世での幸福」をうたい文句に民衆に脅しをかけて祭式に参加させ、「乞食坊主が下層の民衆の意識を形成する」(vol.1, p.216)一方で、民衆の方も、「きれいな女性を妻にして僧侶の歓心を買う」(vol.2, p.15)こととか、フラトーネ(力のある僧侶)と近づきになる(vol.2, p.198)ことに腐心したりするのを苦々しく思っている。スタンダール氏は、『17年版』でもそうなのだが、教会に反感をもっている、サン・ピエトロのミサの儀式などについては、その荘厳さを「美しい光景」と呼んでいるし、ジェズ教会では、「権力がもっとも邪悪なものであっても、それが大きなことを成し遂げたときに抱かせられるあの尊敬を少し覚える」(1817年8月26日)と書いている⁽⁴⁾。

以上、主要なものを三つ並べたが、ミラノ（ロンバルディーア＝ヴェネツィア王国）、ポローニャ（教皇領）、ナポリ（両シチリア王国）といった町とその住人への愛着、とりわけミラノへの思いといったものが、ページを費やして書き込まれている¹²⁾。町の政治支配については直接的に云々していないが、スタンダール氏はミラノのザウラウ総督 Graf von SAURAU やポローニャの教皇領州知事ランテ枢機卿 Cardinale LANTE といった支配者に対しては決して悪い感情を持っているようには書いていない。スタンダール氏は、立派な人物であれば教会人であろうとオーストリア人であろうと敬意を抱き、それは教皇の大臣であるコンサルヴィ枢機卿に対するかれの親愛の気持ちにも見られる。この点では敵味方はなく、人種的偏見もない。かれが嫌うのは権力を嵩にきる人間であり、卑しい俗な人間である。支配関係のあるところでは、支配者側にも、非支配者側にも、そうした人間を生み出しやすいことは言うまでもない。スタンダール氏は、オーストリアが直接あるいは間接に支配するイタリアの現実のなかで客観的に人間観察を行なっている。

6 『1817年版』から『1826年版』へ

「第3版」と称する『26年版』は、おおよそ前節で見たような内容をもつわけだが、初版の『17年版』とどう変更になったのだろうか。分量が増加した分、内容が豊富になったことは見たとおりで言うまでもない。とにかく両著のあいだには、10年間に流れているのである。ベールの置かれた状況は、あいかわらず定職はないものの、大きく変わっている。つまり、『17年版』は、ナポレオンと一緒に没落してイタリアにいわば亡命したベールが、王政復古後3年という時期に出版した著作であり、最初期の著作である。これに対して『26年版』は、1817年以降、数次に渉るイタリア滞在を経験し、とりわけ、ミラノにおける長期滞在はベールの知識を増やし教養を深めたが、その成果の著作であり、また文人としての地位を確立する途次にあるもっとも活動の盛んな時期の著作である¹³⁾。こうした状況の変化が、内容的に大きく影響している。

第1は、政治的、社会的に見たイタリアとイタリア人についての認識の変化である。すでに第2節で見たように、『17年版』では、スタンダール氏のイタリアの現状認識は、この国が「決定的に不振に陥っていて」、イタリア人は自由を希求するものの、それを獲得する手段を見いださずあぐねているというものである。かれは、その点からイタリアに対して厳しく現実を突きつけ、イタリア人を意識改革し扇動するようなどころが見られた。そこにはスタンダール氏の復古体制に対する怒りとでもいうようなものが、形を変えて迸り出ていたと言ってよいだろう。

しかしながら、『26年版』においては、イタリアとイタリア人をさらに本質に遡って捉えようとする姿勢が見られる。同じイタリアでも、地方や町によって異なり、その住人の気質も異なっていることが、いちだんと明らかにされる。スタンダール氏は、一方で偏狭な「控え室の愛国心」を非難しても、住人にはそれぞれの地方や町を支配する政府への対応の仕方があることも承

知している。カヴァレッティ氏の発言として書いているように、「この不幸な国民〔イタリア人〕は、オーストリア、トリノ、モデナ、フィレンツェ、ローマ、そしてナポリの宮廷に支配されている」(vol.1, p.121) のである¹⁴⁾。

『26年版』で増補された部分について主要な町にそれを見てみよう。

まずベールの愛するミラノについては「フェリペⅡ世以来、政府はいつも千五百万とか二千万を掠め取る有害な存在と考えられて」いて、「スペインやオーストリアの支配者を市の敵とみなすことが、何世紀も前からできた習慣である」(vol.1, p.91) と書き、ここでは「政府は世論にいかなる影響ももっていない」(vol.1, p.37) し、オーストリアのフランツ皇帝の入市にもミラノの人は熱意がなく何ら人気を得られない、と記している (vol.1, p.59)。そのオーストリアは、教皇庁の介入を嫌って、僧侶を政治から遠ざけているために、革命前のような支配に戻れないでいるが、スタンダール氏はやがて「オーストリア人とミラノのあいだで憎しみは抑えがなくなり」、苦難の時期になると「ミラノ人はハンガリー人と連携して、皇帝に二院の開設を迫るだろう」と予想している (vol.1, p.95)。

イタリアの他の町は、常にミラノと対比して描かれる。ポローニャについては、ミラノよりも才知、熱情、独創性がある町で、「性格がもっとあけっぴろげである」が、「ここではすべてが聖職者に指導されている」(1816年12月30日付) のである。スタンダール氏はこの教皇の支配する町が、今もって百年前の社会機構をそのまま維持しているが、「この国の支配者たちはもはや残忍さを行使せず、いくつかのペテンを行うだけに抑え、自分たちの快楽を求めるだけに止めている」(vol.2, p.16) と記している。

フィレンツェについては、『17年版』では記述も少なく、ロンバルディーアと対比してあまり好意的に記されていないが、『26年版』でも、「おそらく世界でもっとも清潔な町であり、そして明らかにもっとも上品な町のひとつ」(1817年1月28日付) とされているものの、住人については同じく情熱の欠如が指摘されている。「何かしら窮屈でそっけないもの」がすべての人に見られ、女性の顔には「ロンバルディーアの女性たちがもっている愛情のこもった官能も、情熱に感じやすい様子」もなく、トスカーナでは「才気、誇り、理性、何かしら微妙にかきたてるもの」が存在する (vol.2, p.93) と観察している。スタンダール氏によれば、かれらは混乱をたいへん恐れているので「あらたなコーラ・ディ・リエンツィに働きかけられても、おそらくこれに敵対し、現在の絶対王政に味方して戦うだろう」(vol.2, p.102) と予測することになる。かれはまた、トスカーナ大公のフェルディナンド4世 FERDINANDO IVが「民衆の憎悪のなかではしあわせに暮らせないことを理解して、善良な人として暮らしている」(vol.2, p.103) と書いていて、オーストリアの支配が定着している状況を認めている。

またローマについては、教皇の膝元でもあり、厳しい法令と検閲によって、民衆の自由は束縛されているが、民衆は「三世紀前から、降りかかる禍を不可避で終わらないものと見なすことに

慣れて」しまい、「何を措いても、民衆が望んでいるのは、権力者をバカにし、かれらを笑いものにすることである」（1817年10月10日付）と見ている。大臣を倒しても、また別人に替わるだけというあきらめから、風刺に行き、「ローマの民衆はおそらくヨーロッパ中でいちばん微妙で辛辣な風刺を好む」と分析している。

しかし、スタンダール氏は、ミラノと並んで特別な好意を寄せ、「イタリアの唯一の首都」と認める（vol.2, p.137）ナポリにおいては、サン・カルロ劇場の再建によって両シチリア王フェルディナンド1世 FERDINANDO I への民衆の親近感が増したものの、そのエネルギーから「遅かれ早かれこの国での革命を不可避なもの」にし、「行動あって言葉のないこの国は二十年しないうちに必ず二院を手に入れる」（vol.2, p.163）とか「一八四〇年以前にこの国が憲章をもつというのはぼくの目に明らかである」（vol.2, p.204）と予言している。

このように、『17年版』では、イタリアとイタリア人に対して厳しい意見を述べ、扇動するような姿勢であったものが、『26年版』では、いわば王政復古の混乱を抜け出し一応の落ち着きを見たイタリアを、冷静に観察し分析している。ただそれは、日記の日付の1817年というよりも、ベールがペンをとる1826年の現実に根ざしたものと言えるだろう。

さて、第2に、ナポレオンについての見方である。『17年版』では、ナポレオンの支配が終わり王政復古になったばかりということもあって、ナポレオンを評価することは避けている様子が見られる。1796年のミラノ入城によって、「イタリアは目覚めた」と記すものの、皇帝になってからのナポレオンについては「栄光礼賛によって専制政治を隠蔽しようとした」と書くに止めている（コモ湖畔ヴィッラ・メルツィ1817年7月18日）。しかし、「イタリアにおけるボナパルテの影響」に関心があったことは3月20日付のなかに見られる（p.103）。いや、それどころか、ナポレオンの名前こそ出していないが、序文で「イタリアに及ぼした一人物の影響」を見ると宣言しているのである。だがその影響面では、フィレンツェはかれの施策の自由主義的な面を吸収しなかった（4月10日, p.113）と記しているにすぎない。

これに対して、『26年版』では、前節で見たように、イタリアにおけるその業績を評価し、「ナポレオンの政府によってイタリアは三世紀の向上を一気に果たした」とまで書いている（vol.2, p.115）。ナポレオンの14年間の支配は、「反社会的習慣を根こそぎにし」（vol.1, p.93）また「往事は食い道楽で有名だったミラノを知性の都にした」（vol.1, p.144）と持ち上げている。そして、さらなる支配がイタリアを解放しただろうと繰り返しているのは、見たとおりである。

7 『1826年版』の諸特徴

『1817年のローマ、ナポリ、フィレンツェ』を出版した時点では、ベールはまだカルパーニ GIUSEPPE CARPANI やランツィ LUIGI LANZI などから剽窃したという噂の高い2冊の書物、『ハイドン伝』 *Lettres Ecrites de Vienne en Autriche sur Le Célèbre Compositeur Jh Haydn*

(1816)と『イタリア絵画史』*Histoire de La Peinture en Italie* (1817)の著者でしかなかった。音楽については確かに、1800年にはじめてイタリアの地に足を踏み入れて以来熱心に聞いていたが、絵画をそんなに丹念に見て歩いた様子はない¹⁵⁾。『絵画史』は、むしろ勉強のための翻訳から出発したと言える。したがって『17年版』では、スタンダール氏は音楽(オペラ)については訪問する町ごとに劇場に行き感想を記したりしているが、美術についてはあまり記述がない。マレスカルキ伯爵 Conte MARESCALCHIのギャラリーでのデンマーク人の絵画講義と称するもの(1817年5月3日付)のほか、パルマではコレッジョの崇高なフレスコ画を見たり(1816年12月1日付)、システーナ礼拝堂の『最後の審判』を見たり(12月15日付)しているが、通り一遍である。それに対して『26年版』では、アイエズ FRANCESCO HAYEZ やアッピアーニ ANDREA APPIANI といった同時代の画家の作品を鑑賞するほか、フィレンツェのサンタ・クロチェ教会でヴォルテラーノのフレスコ画に激しい喜びを覚え、恍惚状態となり(1817年1月22日付)、またサロンノのヴィルジネ・デイ・ミラコリ教会やブレラ美術館でベルナルディーノ・ルイニの作品に注目するなど、美術鑑賞のために各地で教会やギャラリーを訪れている。とりわけ、ボローニャ派については、『絵画史』できちんと位置づけられていないうえ、『17年版』ではボローニャを通過しても「十の壮麗なギャラリーを見た」(p.23)としか書かず、その作品には一顧も与えていないが、『26年版』では、カラッチ一族、ゲルチーノ、グイド、ドメニキーノなどの画家が、コレッジョやラファエッロなどととも、何度も名前を引用され、スタンダール氏のみならず、ベールの偏愛する画家たちが明らかになっている¹⁶⁾。

第2に、ベールのミラノにおける文学的な交際とその影響であるが、ミラノにおけるロマンティズム運動の立役者の一人であるロドヴィーコ・ディ・ブレーメ LODOVICO DI BREME とは、『17年版』でもスタンダール氏がスカラ座の桟敷席で話した様子が伝えられている(4月8日付)。しかし1817年の時点で、ベールがどの程度のロマン主義の文学者と交際があったのかは、明らかではない。また、ミラノにおけるロマン主義と古典主義の論戦が盛んになるのは、やっとこの年からである。それでも、スタンダール氏はシスモンディ SIMONDE DE SISMONDI に関して「二つの対立する体系にひきずりまわされている。かれはラシーヌを称賛するだろうか、それともシェイクスピアか」(7月18日付)と書いていて、ベールののちの文学論『ラシーヌとシェイクスピア』*Racine et Shakespeare* (1823, 25)を予感させる部分が見られる。『26年版』になると、1816年11月12日付で、ミラノのロマン主義者たちについて粗描し、『ラシーヌとシェイクスピア』に大きな影響を与えたエルメス・ヴィスコンティ ERMES VISCONTI についての印象などが記される。そして1817年1月14日付では、イタリア語の議論に関係して、「古い言葉の信奉者であるフィレンツェ人は古典主義者」で「ロンバルディーア人はロマンチズムを支持している」と述べたうえ、フランスのロマン主義において言語は問題になっていないことを説明している(vol.2, p.42)。1817年11月3日付では「古代のこの盲目的な真似、これを文学では古典主義と

呼ぶ」と書き、またトレニエーリ2月3日（1817年）付では、革命以降に生まれた若者の考えとして、ラシーヌの悲劇に退屈し「一八二七年〔sic〕の悲劇は、一八二七年のみんなの心臓を高鳴らせる感情に訴えかけなければならない」と書いているが、これらはベール自身が『ラシーヌとシェイクスピア』で展開した考えであり、その考えに基づいてアルフィエーリを否定することもしている（vol.2, p.168）。つまり文学についてはベールがロマン主義の立場に立っていることがここでも明らかにされる。

第3に、『恋愛論』*De L'Amour*（1822）の著者として、女性を男性より劣った存在と見ずに、男性とは異なった存在として、同一のレベルで見ていることである。ベールは『恋愛論』の第2部で女子教育論を展開して、当時としては進歩的な女性観を述べているが、ここでもスタンダール氏は1817年6月19日付（ナポリ）で、かれの購入した一冊の書物から、女性の置かれた条件について語り、イタリアでは男性に対する女性の優位が早くから頻繁に論議されていると述べ、最後にかれの意見として「女性に完全な平等を認めることは、文明のもっとも確実なしるしとなることであろう。女性は人類の知力と幸福の確率を倍増するだろう」（vol.2, p.205）と述べている。そして女性が離婚を獲得するために、女性に決闘が許されてもいいのではないかとまで書いている。また、カステル・ガンドルフォ10月1日付のなかでは、ローマにおいて結婚と家庭があまり男と女を束縛しないが、女性は愛する人の裏切りには容赦しないことが語られている。1月16日付で、スタンダール氏はゲラルディ夫人 *Madame GUERARDI* の発言として、ベールが『恋愛論』のなかで展開した「四つの異なった恋愛」*quatre amours différents* と「結晶作用」*la cristallisation* について触れているが、そこでも「イタリアではほかのどこよりも女性がずっと強い存在である」と書いている（vol.2, p.53）。そして、スタンダール氏は『26年版』でつねに女性の立場に立ち、ベールにはこれを尊重する姿勢が確立しているのが窺えるのである。

最後に、第5節で見たように、スタンダール氏が物語への関心を高めていることである。かれの逸話愛好はすでに『17年版』でも見られ、それはベールの『ハイドン』や『絵画史』といった同時期の著作にも見られたことであった。しかし、ほとんど逸話と例話から成り立っている『恋愛論』をあいだに挟んで、紀行文であるにもかかわらず『26年版』では挿入される逸話は極端に増加している。なかにはボローニ大尉 *Capitano BORONI* の語る逸話（vol.1, p.214）のように『恋愛論』第1巻からの再録のものもある。それらの内容を分析してみると、すでに指摘したように恋愛事件が多いが、嫉妬にかられた男（ジリエッティ、N***侯爵、カミーユの夫***伯爵、アルヴァレーゼ伯爵、ヴァルマーラ伯爵、ラオディーナの夫テランツァなど）や、恋のために男まさりの勇気を発揮したり決断を下したりする女（ジリエッティの妻ジーナ、テオドリンド、ヴィオランティーナ、ラオディーナなど）などが描かれ、それらはまたいわゆる情熱犯罪へと進展する。そこにはイタリア的な、ある種の激しさとでも言うべきものが認められ、こうした人物や事件はベール＝スタンダールの来るべき小説を予告するものと言っていいだろう。

結

以上見てきたように、二つの『ローマ、ナポリ、フィレンツェ』は10年という間隔を置いて出版されているが、『26年版』は単に『17年版』の増補版でないことが、著者のイタリアやナポレオンに対する考え方の大きな進展から見ても明らかであろう。つまり、両著の性格は微妙にずれているのである。また『26年版』においては、10年という歳月で、ベール＝スタンダールのイタリア体験がさらに加わる一方、そこから得たものが教養としてかれのうちに蓄積して、いくつかの著作となって実を結んでいるが、そうした教養の深まりの結果をこの『26年版』のなかに展覧することができる。かれのイタリア文化理解のなかから、音楽や美術における嗜好、文学観、女性観もしくは恋愛観が作り上げられている様子が分かるであろう。そしてその根底には、ひそかに小説家が準備されているのである。周知の通り、スタンダールは同時代を表現する手段としては、もはや小説しかないと考えるようになるが、かれがイタリアで培ったものがそのために動員される日が接近していることが、この著書を通して予見されるように思える。

注

- (1) 『イタリア紀行 (1817年のローマ、ナポリ、フィレンツェ)』1990年、新評論刊、および『イタリア旅日記 (ローマ、ナポリ、フィレンツェ1826)』I & II, 1991, 92年、新評論刊を参照。以下、引用は上記拙訳から行っている。前者はアンリ・マルチノ HENRI MARTINEAU 編集の評訳版 (Le Divan, 1956) とプレイヤード版を底本に、後者はオリジナル版の差し替え版 (Delaunay, 1826) を底本にして翻訳したものである。
- (2) ディヴァン版全集本『ローマ、ナポリ、フィレンツェ』の「まえがき」にアンリ・マルチノは次のように書いている。「この新版〔26年版〕は厳密に言えば、増補版ではなくて、1817年版のせいぜい4分の1を挿入した、むしろ新しい本である」(vol.1, p.xxi)
- (3) 『1817年版』は、註1で示した評訳版のあと、ロラン・ベイエル ROLAND BEYER によるポケット・ブック (Julliard, 1964) が出版されている。
- (4) たとえば、『17年版』では、ペーザロ1817年5月24日付、ロヴィーゴ1817年6月4日付と6月6日付など。『26年版』では、クロトーネ5月20日付、カタンツァーロ5月23日付など。
- (5) 『17年版』では、1817年2月27日付でもアルフィエーリについて記されているが、この部分は『26年版』の1817年4月2日付に再録されている。
- (6) 『エディンバラ評論』の影響については、デル・リット著『スタンダールの教養生活』*La Vie Intellectuelle de Stendhal* (P.U.F, 1962) 第3部第2章Iを参照。同誌第15巻30号のアルフィエーリに関する記事は *Memoires of Victor Alfieri written by himself* の書評 (pp274~299)、であり、革命前のパリの社交界に関する記事は *Correspondance inédite de Mad. Du Deffand, avec D'Alenbert, Montesquieu, le président Hénault. &c. &c 3tom. And Lettres de Maddle. De Lespinasse, écrites depuis l'Année 1773 jusqu'a l'Année 1776 &c 3tom* の書評 (p.453~485) である。なお、セルクル・デュ・ビブリオフィル版 *Cercle du Bibliophile* やプレイヤード版の註では、ポローニャ1817年

5月4日付のマレスカルキ伯爵のギャラリーにおけるデンマーク人の絵画講義と称されるものも、このスコットランドの雑誌から「そのまま」借用しているところがあるが、ベールが読んだと思われる1810年から17年までの同誌を通覧したところでは、そのもとの記事は見つからなかった。これはむしろ第22巻44号（1814）のフォーサイス JOSEPH FORSYTH の『イタリア管見』*Remarks on Antiquities, Arts, and Letters, during an Excursion in Italy, in the years 1802 and 1803* に関する記事が引用した原文のスタイルを真似たものではないかと思われる。その記事では「以下の部分は、断固とした独創的な観察家が美術について述べているところだが、そこにこめられた力が見られよう」という紹介のもとに、カラヴァッジョ、ラファエッロ、ドメニキーノ、ガイドなどを説明する原文が示されている。

- (7) 5月1日付では、ポローニャの丘（ゲーテの著書ではアシネッリの塔）のうえからの眺望、6月24日付では、芝居を現実と取り違えた観客が登場人物の暴君に抗議する様子、そのあとの「ヴェネツィア断想」のなかのものは、マラモッコやペッレストリーナの女たちが漁をしている男たちに歌で呼びかけるということ、およびヘロデス王とヘロディアスとヨハネを描いた絵画の描写、これらがゲーテの『イタリア紀行』からの剽窃であることが分かっている。
- (8) すでにデル・リットは前掲書の第3部第2章Ⅱで『17年版』を政治風刺書 un pamphlet politique であると性格付けをしている。
- (9) 『17年版』では、ローザンヌ1817年8月20日付で、ナポリの独立党に関する逸話を思い出として書いている。これは『26年版』のレッチョ・ディ・カラブリア5月29日付で再録されている。また、アルクァ6月10日付では、あるフィレンツェ人がバッテリーのカフェで語るフランス人の大尉ラ・フォンテーヌ氏の逸話がある。こちらは『26年版』で再録されていない。
- (10) 『26年版』のエピグラフで『ペルシャ人の手紙』からとして、「ああ、ムッシュウ、どうしてペルシャ人でいられましょうか」Ah! monsieur, comment peut-on être Persan? とあるが、これは何か関連があるのだろうか。
- (11) これは『17年版』においては、1816年12月31日付になる。『26年版』の差し替え版では「極悪の」scélérat が伏せ字になっているが、『17年版』のオリジナル版では伏せ字になっていなかったことが、セルクル・デュ・ビブリオフィル版のダニエル・ミュレール DANIEL MULLER の註で示されている。
- (12) ミラノに対するスタンダール氏の讚美は随所に見られる。たとえば、ベルジョイヨーゾ12月14日付では、「ぼくがミラノを懐かしく思うのは〔中略〕ミラノ全体の習俗すべてのせいである。態度に見られる自然さである。善良さである。ここで実践されている幸福になるすべである」と書いている。
- (13) ベールは1821年にミラノを発ちパリに戻ると、22年に『恋愛論』*De l'Amour* を出版し、この年から『パリス・マンスリー・レビュー』*Paris Monthly Review* や『ニュー・マンスリー・マガジン』*New Monthly Magazine* に寄稿を開始する。23年には『ラシーヌとシェイクスピア』および『ロッシニ伝』*La Vie de Rossini* を出版、24年には『パリ新聞』*Journal de Paris* や『ロンドン・マガジン』*London Magazine* にも寄稿、25年には『ラシーヌとシェイクスピア』第2部や、『産業家に対する新たな陰謀』*D'Un Nouveau Complot contre Les Industriels* を出版する、といった具合に文人として活躍している。
- (14) オーストリアはイタリア北部のロンバルディーア＝ヴェネツィア王国を直轄領として支配した。トリノーはサルディニア王国、モデナはモデナ公国、フィレンツェはトスカーナ大公国、ローマは教皇領、ナポリは両シチリア王国が治めていたが、すべてオーストリアが間接的に支配していた。
- (15) 『17年版』のもととなった1811年のベールの日記では、例外的にポローニャでギャラリーを見て歩き、

ボローニャ派の画家たちの作品を見た様子が記されている。グイド GUIDO LENI はこの時からベールのお気に入りの画家となった。

- (16) 『絵画史』の続編にあたる草稿ではマルヴァージャ CARLO CESARE MALVASIA の『ボローニャ絵画史』*Felsina Pittrice*をもとに、ボローニャ派について長い論考を試みている。

* 本稿執筆にあたり、本学図書館を通じて、立教大学武蔵野新座図書館所蔵の『エディンバラ評論』のバックナンバーを閲覧させていただいた。記して感謝申し上げます。